

小幡道昭『経済原論 基礎と演習』第1篇第3章「資本」コメント

コメンテーター: 植村高久

I. 「資本」章の内容とコメント

まず、これまでの『原論』と対照させて、小幡『原論』「資本」章の特徴を挙げておく。

第1節の「資本概念」は、マルクス由来の資本概念と山口重克『経済原論講義』以来の利潤(率)に関するかなり踏み込んだ規定を含む。第2節「資本の多態化」は、従来の商人資本、利子付き資本、産業資本という三形式を否定し、「商人資本」へ一本化しようとする試みである。ただし、代わりに示される「多態」の内容である三態は、実質的に特定の資本‘形式’を含意しているように読める。最初の「姿態変換概説型」はモロ商人であり、「姿態変換内接型」は「安くつくる」(p.90.)という方向性を示し、内実としては産業資本の起源論となっている。第3の「流通費用節約型」は、実質的に商業資本である。小幡『原論』の特徴は利子付き資本(金貸資本)形式を完全に排除した点にある(ただし賃料を伴う貨幣貸借は第2章の章末で解かれている)。第3節「市場の軸心」は、「資本なき商品流通」=単純商品流通の否定論である。資本が商品流通を動かすという中心性があって、商品の「他人のための使用価値」という特性が担保され、体系が完結性を持つとされる。

全体に斬新な論点が提起されており、改めて原理論というものを考え直させて頂けた。まだこなれていないように見える部分もあり、さらに何故、「資本家」抜きで説かれているかという疑問は残ったが、方向性は概ね首肯しうる。

II. 論点

Q-1.: 「動機」と資本家について

資本は $W-G-W'$ とは「その動機において異次元」であるされ、具体的には「(永遠に)繰り返す」(p.79.)という特性が示される。この規定自体は首肯できる。だが、「動機」とは書かれているが、この章ではいわゆる流通主体は登場せず、「価値を主語に持つ価値増殖」(p.81.)が説かれる。前章は流通主体の諸相がかなり具体的に描かれていたのとは対照的である。なお山口『原論講義』は、「価値がいわば貨幣から独立して、それ自体が過程の主体となって運動し、自己増殖するということではない。……貨幣の増殖を追求する個別的な流通主体としての資本家の行動が、この価値の姿態を変えることを通して価値の増殖関係体としての資本を作り出し、そのことによって価値は運動体となる」(p.55. 下線部引用者)とされる。ふつう、「動機」というと「資本家の」と言うのが分かりやすい。また、 $G-W$ が「投資」であるのも、当事者が次に $W-G'$ 「回収」を意図しているからで、外から $G-W$ を見てもそれが資本運動かどうかは分からない。この点からみても、「資本家」とその「動機」はワンセットで資本運動を説く基本枠組みのように思われるがどうか。なお、神のような全知全能の観察者の立場もありうるが、このような観察者を設定するとすればそれなりの方法論が必要になろう。小幡氏の場合、意識的に「資本家」を排除しようとしているように見えるが、その意図、成果は何かご教示頂きたい。

Q-2:販売代位との関係

前章末に「販売代位」の項があり、そこですでに G-W-G'が示されている(p.76.)。ただし、資本の運動は「単一の(1回限りの)販売代位とは違う」(p.82)ともされる。この点も「その動機において異次元」という点に関わるが、考え方としては①商品・貨幣・資本という展開に伴って、流通主体の性格が異次元だと理解がまずありえ、②商品・貨幣・資本の展開によって当事者そのものがより高次の特質を備える主体に成熟していくという考えもありうるが、③最初から、資本を説くのに十分な当事者特性を持つが、展開によってはその一部だけを取り出すことで、各々の論理次元で展開させているという理解もありうる。この章の最後の「完結性」からみれば、小幡説は③であるようにも思われるが、そうであれば「1 回限りの」販売代位というようなよりナイーブな形態はどのようにして導かれたのかという点が問題になる。

Q-3:貨幣蓄蔵の「難点」から資本を説くこと

貨幣には「富を蓄えるという観点から見ると、貨幣自身の価値の不可知性という代償」がある点や「減価の危険」(p.79.)という蓄蔵貨幣の難点から、資本による価値増殖が説かれていると思われる。貨幣「価値の不可知性」とは、貨幣自身の価値は結局「物価表を逆読み」しなければ分からないということであろうが、これによって貨幣所有者は少々不安になるとしても、とくに何か問題が生じるとは思われない。また、「減価の危険」については、マルクスは逆に運動体としての産業資本に対する「価値革命」の脅威を強調している(K.11.第 4 章)。つまり、少なくとも資本になれば免れうるというものではない。確かにインフレーションになれば、貨幣を実物資産や証券に転化する投機が行われるが、逆にデフレーションの下では、貨幣は「増価」するので、いわゆる流動性選好が生じる。貨幣の減価の危険は確かにあるが、資本になれば免れうるものではなく、またいつもそうではないと考えられる。この点について、どう考えるか伺いたい。

Q-4:「価値実現のための費用」(流通費用)の「矛盾」

第 2 章で前もって「商品売るためには、売られる商品とは別に資材や活動が不可欠」であることが指摘されていたが(p.68.)、流通費用を利潤から補填できるという点で、資本は「商品自体の価値とその実現のための費用の矛盾を解決する」と主張される(p.83.)。これは難しい問題である。訴訟の費用や契約のための交渉が「別に」要し、価値を高めない活動であることは言えそうであるが、保管費・運輸費とたどって行くと、次第に生産費との区別が曖昧になる。しかも、これは観察者の立場から見てさえそうなのである。加えて、当事者の視点から見れば、いずれも商品を(より高く)売るための費用(労力や資材)なのである。たとえば、大根を畑で耕作する労働だけでは、大根は売れないので、町まで運んで市で交渉して売る農民の場合、畑での労働と町までや運搬や交渉はいずれも商品を販売するために必要なもので、その間に特段の区別があるわけではない。Q-5.で述べる販売量との対応関係の違いを除けば、とくに両者を区別する理由はないように思われる。卑見によれば、生産論を経て価値形成の何たるかを明らかにする前に、流通費と生産費(価値)の区分を導

入ことは難しいように思われるが、如何か。

Q-5: 流通費用の取扱い

山口『原論講義』では流通費用の一部も生産費とともに個々の「商品の売買に直接的、個別的に必要な費用」と考えられ、「商品が販売されるたびにその販売価格から全面的に回収されねばならぬ」(山口 p.60.)としている。他方、小幡説では商品買い取り費用のみが $G-W-G'$ の循環を描き、流通費用はすべて粗利潤から控除されるとしているが(p.84.)、その意図ないし根拠は何か？

Q-6: 利潤率計算の分母について

「分母には出発点の資本額がくる」(p.85):ここでなされている損益計算書や貸借対照表の処理ではストック計算(貸借対照表)は期末のものである。そうすると、資産－負債＝純資本という形でしか分母は把握できない(分母は期首の資本の他、資本剰余金を含むはず)。資本が利潤を付け加えながら、繰り返し投下され、自己増殖するというここでの資本概念に照らして、この点は当然のことと思うが如何か？なお、回転期間について、「事後的に……計算で与えられる結果値にすぎない」とされているが、利潤率も分母も含めて、「結果値」でしかない。また、投下(前貸)に関して個人資本家の場合は、投資額が「頭の中で分けられているだけ」(p.80.)との記述もあるが、法人会計になっていない場合は、 $G-W$ を投資、 $W-G'$ を回収と考えてもおかしくないが(ゆえに、単純な利潤率計算は無意味なので行われぬ)、この点はどうか。

Q-7: 姿態変換型資本について

資本の価値増殖には「三つの基本パターン」(p.87.)があるとされるが、基本は(1)「姿態変換を通じて価値増殖し粗利潤をふやす」とことと(2)「姿態変換の過程で消費される資材や労力を費用化し、粗利潤から控除されるコストを相対的に節減する」ことの2パターンである。(1)に関して、(a)「一物一価を想定する」場合と(b)「同種商品の価格分散が存在する」場合に分けているが、この2つの場合は両立不可能な場合分けであるように思われる。この場合分けを肯定する根拠は何か？第一に「一物一価」則は成立しないと別のところで述べているが(pp.54-5.)、これと整合するか、第二に、前者の場合(姿態変換外接型 pp.88-9.)は、国際取引における価格体系の違いに基づくいわゆる裁定取引であり、各国における「一物一価」を自明の前提として国ごとの価格体系の違いを考える枠組みに基づく。このような枠組み(事例)を原理として説く含意ないし狙いはどのような点にあるか？

Q8.: 姿態変換内接型資本と「二重価格」をめぐって

「市場が無秩序な商品売買の場であるために」二重価格が生じるとされるが(pp.90-2)、相場が成立していることが前提条件で、そのうえで販売期間の不確実性から「安売り」が生じるという主張である(cf.pp.67-9.)。ここでは、第1に一物一価則が成立していないとすれば、「相場」とは何か、どのように成立するのかが疑問である。第2には、一般的に(資本に限らず)「できるだけ早く売りたい」ことが想定されているが、他方では資金を余らせている当事者もいる(p.70.)とされているから、「早く

売りたい」という動機はもう少し限定ないし説明が必要だとおもわれるが、どうか？第3に、販売の不確実性という問題は確かにあるが、F.ナイトが述べているように、大量生産・大量販売においては「大数法則」が成り立つので、個別的購買における極端な変動は均されると考えて良いように思う(F. Knight. Risk, Uncertainty and Profit.)。そうでなければ、特定の買い手を定めない市場向け大量生産を特徴にする資本家的生産様式は成り立ち得ないだろう。

Q9: 流通費用節約型資本

流通にかかる資材や労力が資本の下で初めて費用化され、明示化されるということは首肯しうる。ただし、この流通費用は「販売される商品と切り離して取引することはできない」(p.94.)とは言えない。「保管という用益」は「独立した商品として売る」(pp.93-4.)ことができる。また、諸品を買い取らなくても、売り手と買い手とを紹介して仲介料を取るような取引の可能性もある。商業資本のように、リスクをすべて負担する形で商品を買取るのは、流通費用の資本化の一つの方法にすぎず、それ以外の多様な用益や流通諸契機の商品化がありうると考えるべきではないかと思う。小幡氏が殊更こうしたことを否定している訳ではないと思うが、「用役」の「売買」一般(=商品化)が既に論じられている(p.73.)という点から見れば、もう少し幅の広い「用役売買型」の資本を説くことができるように思われるのだが。

Q-10: 商人

「商品の転売を専業とする」商人の「活動なくしては市場は市場として機能しない面がある」(p.95)という主張は首肯できる。ただし、新古典派のような「完全競争」と呼ばれる市場には商人は存在できないという点に、もう少し留意すべきだと思う。すなわち、「相場」というような範疇は商人活動によって初めて成立すると思われるが、「一物一価」が前提される市場では「相場」は既に成立しているために商人が利潤を得る機会はなく商人は存在できない。私は商人のいない市場というものは想像することさえ難しいと考えているが、経済理論では逆に商人の存在する余地がないか、あるいは少なくとも明示されてこなかったように思われる。したがって、商人の存在は市場をどのような像として捉えるのかに依存していると思う。こうした商人を存在させうる市場像をどのように構想すればよいか、ご教示頂きたい。

Q-11: 商人の活動

確かに商人は「市場で取引を成立させるために必要な資材や労力を流通費用」として内部化している(p.96.)というのは正しい。だが、この章の原点に帰れば、増殖する価値の運動体が「主語」であり、「主体」であるという点への省察がここでも必要であるように思われる。すなわち、たんに労働力商品化を通じて、労働者は労働力を資本に売らざるを得ないだけでなく、まさに「命懸けの飛躍」たる販売を資本が担い、そこに流通費用を投じることによって、経済が資本家が支配する何物かに変質する。すなわち人間は生存とか生活とかの次元を超えて、消費者として消費過程に巻き込まれ、全生活を資本に支配されるようになる。商人としての資本はたんに市場を成立させるだけでな

く、絶えず消費者を刺激し、「命懸けの飛躍」をより円滑かつ大規模に実行するための活動を積み重ねてきた。これを通じて、初めて「命懸けの飛躍」を乗り越えた無限の価値増殖が可能になっているという積極面は見逃すべきではないと思うが、如何か。

Q-12: 市場の完結性

「市場の完結性」(p.97.)とは、「他人のための使用価値」という商品の性格が資本によって純粋化され担保されるという主張である。議論がこれによって円環を描いたことを「完結性」と呼んでいるが、「市場が生産や消費の領域から独立し、内的に閉じた領域であると勘違いしてはならない」とされている通り、市場はむしろ「開放システム」、あるいは「関係の束(nexus)」と捉えられるべきもので、そうであればあえて「完結性」という言葉を使うのは誤解を招くように思われる。経済学はその出発点から、国民経済という閉じた系で物事を捉えてきた。その遺産である思考法が支配しており、商品資本循環を再生産表式のように全社会を覆うものと見れば、全社会の資本による生産と総生産物分配を含めた文字通りの「完結性」が示される。だが、これは観察者による抽象であり、実際の生産や「市場」は各々ばらばらに区切られた私的な領域で行われ、その間には主に資本に担われるアドホックな関係しかない。こういうように考えると、「市場は形式においては閉じているが、内容においては外部とのモノのやりとりが不可欠」だ(p.98.)というような言い方にもかなり抵抗感がある。「論理的に完結している」という意味であれば了解可能だが、形式的に「閉じている」といいうるか疑問である。